

千鳥ヶ淵周辺の景観・サクラの特性、現状

1 概況

千鳥ヶ淵は、皇居や千鳥ヶ淵戦没所墓苑に隣接することや、周囲を樹林で囲まれており、都心にありながら静謐性の高い、特異な景観となっている。

また、濠、田安門などの遺構を残しており、江戸城を偲ぶ歴史的景観を維持している。

さらに、千鳥ヶ淵周辺には、明治期からサクラが植栽されており、春の花の時期には、東京有数のサクラの花の景観を楽しむことができる。

また、千鳥ヶ淵は、周囲が樹林で囲まれていることや、四方を谷や堤で囲まれ、岸辺に平地がほとんどないことなど他の外苑濠とは異なった景観的特色を有している。

一方で、濠の水質の悪化によるアオコの発生や、濠周囲のビルや都市施設の整備による景観への影響も生じている。

歴史的な経緯を見ると、この地域一帯は、武蔵野台地の縁の高台にあたり、濠の向こうに市街を俯瞰する地として江戸時代から知られていた。明治以降は、行楽施設の整備、サクラの植栽などもあり行楽地として位置づけられるようになった。その一方で、神社や軍事施設に近く、鎮魂の場としての性格も帯びるようになった。

戦後、国民公園となり北の丸公園が整備されると戦前の軍事的な性格は薄れ平和的文化的な場となっていったが、行楽の場、慰霊の場としての性格は今にも引き継がれており、この地域の景観の考え方に影響を与えていると考える。

2 管理上の位置づけ、取組

皇居外苑濠管理方針においては、外苑濠の象徴性や歴史に係る景観について維持継承することとし、併せて、自然景観の保全を図るとともに、都市的な景観にも可能な範囲で配慮することとしている。また、濠側の視点場の適切な管理を行う方針である。

また、同管理方針では、サクラの植栽について近年、老木化が進み、更新期が近づいていることから今後の維持管理のあり方について検討が必要としている。これに関しては、サクラを区の花とする千代田区が中心となって取組を進めており、「区の花さくら再生計画」を策定し「区の花さくら連絡会」「さくらサポーター」などの取組が進められている。

3 利用の概況

景観は、見る人（利用者）の存在があって初めて成立することから、利用

の状況を把握することが重要である。

(1) 通年での利用状況

千鳥ヶ淵は、周囲が斜面や堤に囲まれており、水辺へのアクセスは、ボート場に限定されている。このため、水とふれあうような直接的な利用は、千代田区の運営するボート場の利用者に限定されている。ボート場の年間利用者は、年によって変動が大きい概ね年間2万人弱から3万人の間となっている。

一方、周辺の緑道、歩道、北の丸公園からは、樹木越しに水面を俯瞰することができる。これらの利用者数を正確に把握することは難しいが、桜祭りの時期だけで100万人が訪れ、また、北の丸公園の園地は年間約20万人が利用しているとされることから類推すれば、少なくとも年間100万人のオーダーでの利用があると考えられる。

これら周辺部の利用は、歩道が主であることから、一部ベンチや展望広場に滞留している利用者もみられるが、ほとんどが歩行（散策）と考えられる。ジョギングについては、最も利用の多いと思われる皇居周回コースから外れていることからそれほど利用は多くないと考えられる。

(2) 桜の時期の利用状況

桜の花の時期には、桜祭りが開催（千代田区観光協会主催）され、期間中約100万人の利用者が訪れる。また、周辺の北の丸公園等でも桜の花を見に多くの利用者が訪れる、

この時期の利用形態は、基本的に他の時期同様、散策とボート場利用であり、滞留しての花見は面積的に狭いこともあって、基本的に行われていない。なお、近年は、夜間ライトアップを行っており夜間の利用も見られる。

4 視点場と視対象の現況と景観の特徴

(1) 濠の景観の見え方

千鳥ヶ淵は、周囲を斜面、堤で囲まれた細長い窪地であり、ボート場やボートから見れば、水面、石垣、堤塘、堤上の樹林によって周囲の市街地から隔てられた景観となっている。また、濠自体が屈曲し、見通せる範囲が比較的狭く、また、ボートによる移動により、見える範囲が変化していくことも特徴といえる。

また、周囲の千鳥ヶ淵緑道、田安門周辺から靖国通り沿いの歩道、代官町通りの土手、北の丸公園西側の斜面上からは樹木越しに水面を俯瞰することができる。ただし斜面が急であるため、水面を俯瞰できる範囲は斜面上の狭い範囲に限られ、数mセットバックしただけで水面が見られなくなる場所が多い。このため、歩道を挟んだ場所を通る車道からはほとんど見えない。

(2) 景観の特性と構成要素

① 象徴性

千鳥ヶ淵は、皇居を取り巻く濠や皇居から連なる森の一部をなすことから、皇居全体の持つ象徴性（皇居らしさ）を構成している一部と位置づけられる。ただし、皇居と直接接している場所が無く、歴史的な土地利用からも皇居外苑濠の中では比較的皇居との関係性は薄い。

また、皇居との関連ではないが、千鳥ヶ淵戦没者墓苑等と隣接し、鎮魂の場としての静謐、安息の場としての正確を有していると考えられる。

②歴史的景観

千鳥ヶ淵は石垣、堤塘を含めて、隣接する田安門とともに江戸城の遺構である。また、周辺には九段坂の常夜灯や近衛師団司令部跡（現国立近代美術館工芸館）など近代以降の歴史的建造物も多い。

千鳥ヶ淵自体が歴史的景観と言え、その意味ではこの地域の景観の歴史性は高いと言えるが、その後の道路建設や周辺の都市開発、樹木の植栽により、過去の景観から変化している部分も多く見られる。

③自然的景観

千鳥ヶ淵の地形は起伏や屈曲が多く、人工的な直線が少ないこと、石垣が堤塘に比べ少ないこと、周囲が樹林で覆われていることもあって皇居外苑濠の中では自然的な印象が強い濠といえる。

ただし、現状は水質が悪く水中生態系が豊とはいえないこと、公園樹木としての植栽が多いため、自然環境としての質は必ずしも高いものではない。

（3）サクラの花の時期の景観

千鳥ヶ淵一帯には、多数のサクラが植栽されており、その中でもソメイヨシノが多い。このため、ソメイヨシノの開花期には、ほぼ一斉に開花し、サクラの花一色の景観となり、その後、一斉に散り、水面に大量の花びらを浮かすことになる、

サクラの花の時期に、利用者がどのような景観を注目しているのかを分析することが重要であり、その方法は様々考えられるが、千代田区が「千代田のさくら写真コンクール」を毎年実施しており、この内容を分析することも一つの参考と考えられる。今年度の作品で千鳥ヶ淵を扱った風景写真を見ると、サクラの花と濠の水面、水面の花びら、ボートを合わせて被写体として選んでいる例が多かった。また、夜景を撮影しているものも見られた。

また、写真は、静止した景観であるが、実際の利用は、千鳥ヶ淵緑道の通り抜けであり、ゆっくりした速度で移り変わる動的な景観（シークエンス景観）であり、このような景観の把握、分析が必要と考える。

なお、千鳥ヶ淵周辺に植栽されたサクラは、近年、老木化が進んでおり、致命的な病害の蔓延のおそれや、樹木の成長とともに鬱閉化が進み、景観的な劣化が進んでいる。このようなことから、サクラの景観を維持するためには、伐採、整理を含む樹林管理が必要となってきた。

⑧



①



②



⑦



⑥



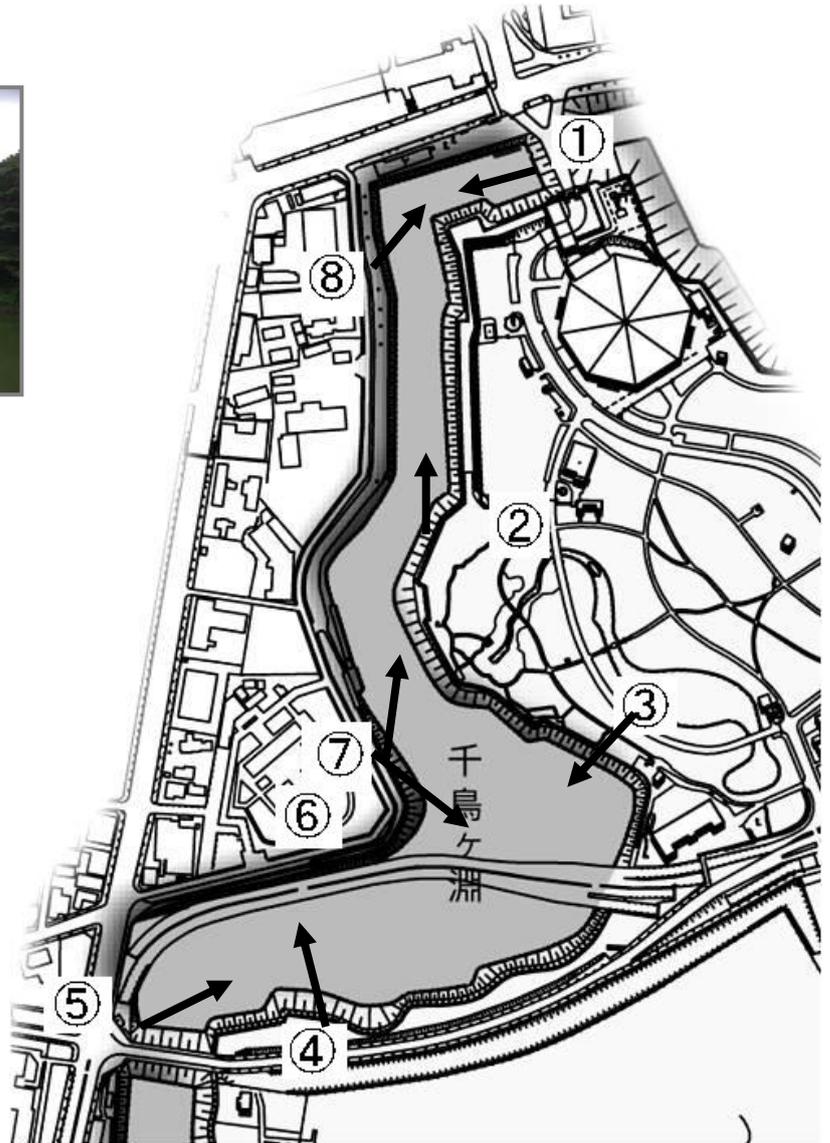
⑤



④



③



千鳥ヶ淵周辺のサクラ植栽・利用の歴史的経緯と絵画・写真 におけるサクラについて

※:本資料は、第1回勉強会資料をもとに再構成したものです。

1. サクラ植栽・利用の歴史的経緯

- ①千鳥ヶ淵周辺のサクラ植樹は、明治2年の招魂社(後の靖国神社)建設後に戦友会が境内にサクラを献納したことに発する。
- ②千鳥ヶ淵沿いのサクラ植樹は、明治14年の英国公使館前にアーネスト・サトウ氏がサクラを手植えたことに端を発し、同31年には東京市による桜並木が整備された。
- ③その後も大正8年の千鳥ヶ淵公園開園、関東大震災後の帝都復興事業に伴う桜並木整備がなされ、昭和44年に開園した北の丸公園にも濠沿い及び園内に桜が植えられた。さらに昭和54年の千鳥ヶ淵緑道整備により、千鳥ヶ淵沿いの桜並木は靖国神社から英国大使館前までを、ほぼつなぐように整備された。

著作権保護のため図を表示しません。

千鳥ヶ淵と周辺地域の利用、景観に関する歴史

年	千鳥ヶ淵周辺の利用・景観に関するできごと	江戸城・皇居・周辺地域に関するできごと
1636(寛永13)	○現在の田安門が築造される。	○江戸城完成。(三代将軍家光)
1869(明治2)	○招魂社(後の靖国神社)建設後、園内に陸海軍の戦友会が桜を献納していき、桜の名所として親しまれる。	
1871(明治4)	○九段坂の陸軍省御用地内に常燈明台を建てる。	
1881(明治14)	○英国公使館前にアーネストサトウ氏が桜を手植え。	
1897(明治30)	○上記の公使館前の桜が東京市に寄贈される。	
1898(明治31)	○英国公使館前に桜並木が植樹され、千鳥ヶ淵沿いが桜の名所として親しまれるようになる。	
1900(明治33)	○代官町通りの整備により、新たに土橋が築かれ、千鳥ヶ淵は、千鳥ヶ淵と半蔵濠に分かれる。	
1907(明治40)	○牛ヶ淵、千鳥ヶ淵の土手を削り、坂下から坂上に市電を開通。	
1910(明治43)		○旧近衛師団司令部庁舎(後の東京国立近代美術館工芸館)建設。
大正	1919(大正8)	○明治期の市区改正事業の一環として千鳥ヶ淵公園が開園し、沢山の桜が公園に植樹された。
	1923(大正12)	○この後の帝都復興事業により、九段から半蔵門方面へ抜ける内堀通りが作られ、桜並木も英国公使館前から靖国神社まで続くように植えられた。
昭和	1933(昭和8)	○濠周辺、都市計画法に基づく美観地区に指定。(建築物の高さ31mまでに規制)
	1934(昭和9)	○軍人会館(現九段会館)完成。
	1946(昭和21)	○皇居周辺一帯を含む東京特別都市計画緑地を整備する都市計画決定。
	1950(昭和25)	○千鳥ヶ淵の区営ボート場が開設され、ボート利用が始まる。
	1954(昭和29)	○さくらまつり開始。
	1958(昭和33)	○納涼とうろう流し開始。
	1959(昭和34)	○「国民公園及び千鳥ヶ淵戦没者墓苑管理規則」公布。 ○千鳥ヶ淵戦没者墓苑建設。
	1960(昭和35)	○「江戸城跡」史跡指定。
	1961(昭和36)	○田安門、清水門が重要文化財指定。 ○江戸城外桜田門、田安門、清水門、重要文化財指定。
	1963(昭和38)	○「皇居周辺北の丸地区の整備について」閣議決定。北の丸地区を皇居外苑の一部とし、森林公園として建設省が整備することとなる。
	1964(昭和39)	○日本武道館、科学技術館が北の丸公園に竣工。 ○千鳥ヶ淵の上に高速道路が開通。
	1969(昭和43)	○千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会により、千鳥ヶ淵に毎年コイの放流が行われた。(～昭和60年まで)
	1979(昭和54)	○千鳥ヶ淵緑道が整備され、北の靖国神社から南の千鳥ヶ淵公園まで桜の名所としてにぎわうようになる。

※参考:『事務提要(国民公園)』、『皇居外苑風致考』(池辺武人著)、『皇居前広場』(原武史著)、小平市立図書館HP江戸年表、千鳥ヶ淵、牛ヶ淵、北の丸公園及び周辺地区

2. サクラが描かれた絵や写真

- ・ 図1の写真(絵葉書)はこの時代の千鳥ヶ淵沿いの桜を代官町通り土橋付近から北東方面(現在の戦没者墓苑、北の丸公園方面。)を撮影したものと思われる。
- ・ 近景に花の咲く桜の若木を映し、中～遠景に水量豊かな水面をメインにとらえ、背後に桜の花、土手と松の木を配している。

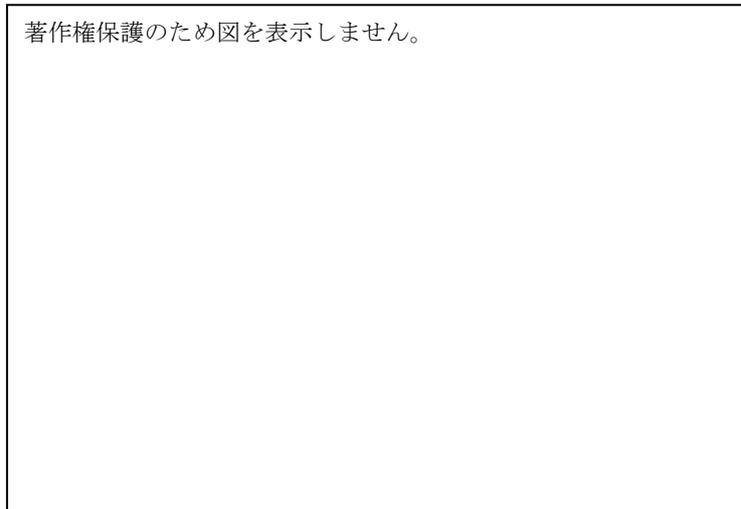


図1-千鳥ヶ淵の桜花と題された明治40年以前の絵葉書 (引用：明治・大正・昭和東京写真集大成)

- ・ 図2は、明治32年頃の靖国神社の境内で本殿西側にある神池庭園のサクラ開花時の散策風景を描いたものである。大道芸人などもおり、サクラを楽しみながら人々が歩く、にぎわいのある、楽しい風景として描かれている。

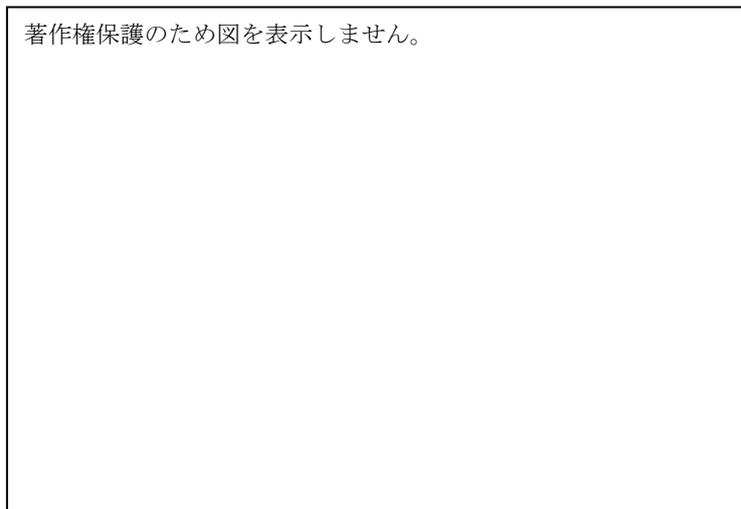


図2-明治32年頃の靖国神社庭園の散策風景(引用：「図会に見る日本の百年3巻-新撰東京名所図会」)

- ・ いま半蔵門から千鳥ヶ淵にかけての内堀通りは、今もサクラの華やかな場所だが、大正時代には既にこのように咲き誇っていた。大正 8 年に整備された千鳥ヶ淵公園側から英国大使館前方面のサクラを望んでいる。

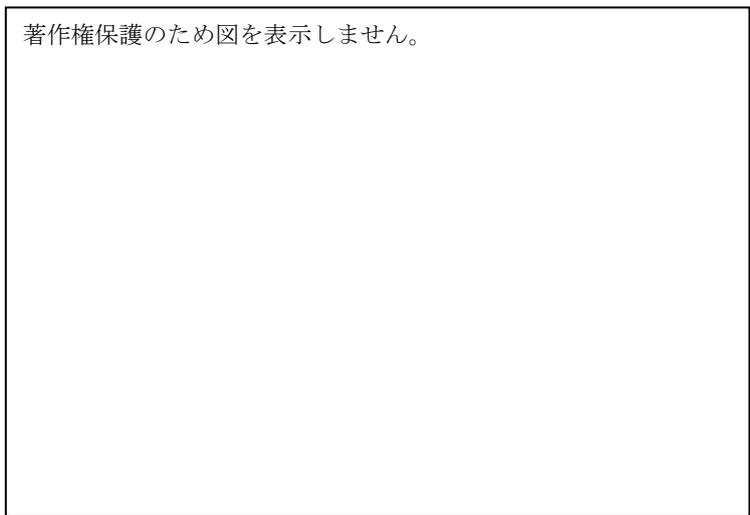


図 3-半蔵門外英国大使館前と題された大正 8 年以降の絵葉書 (引用：明治・大正・昭和東京写真集大成)

景観・サクラに関する論点について

千鳥ヶ淵等における景観・サクラに係る議論について、これまでの議論や事務局としての問題意識等から、議論が必要と思われる事項及びその内容について以下に挙げる。

1 基本的な方向性

○基本的な方針は、皇居外苑濠管理方針による。皇居等の象徴性、江戸城等の歴史性に関する景観の保全を優先。その上で、自然環境の保全や公園利用の状況を踏まえた景観の形成を図る。

○既に・景観・サクラについて千代田区等により取組が進められており、これをベースとして検討。

○景観という特性上、濠水面のみならず周辺地域や利用動線を含め議論（あくまで、濠が主対象）

2 景観について

○景観は、見る人（利用者）の状況に左右されることを踏まえ、どのような景観利用がされているか実態把握を進め、そこから改善点の有無を検討。

○景観利用の特性によっては、例えば、移動しながらの動的な景観（シークエンス景観）に対する配慮などの視点からの検討も重要。

○水質の改善や自然環境の再生に伴い景観が変化する可能性。これまでの景観を重視し、保全する場合と、変化した景観を受容するための共通認識の形成の両面。

3 サクラについて

○千鳥ヶ淵のサクラは、明治以降の歴史や文化的背景があり、日本有数の桜の名所として評価されるが、千鳥ヶ淵には皇居の象徴性や江戸城の歴史的景観があり、それらへの調整、共存（根による遺構の破損防止等）が必要。

○現在のサクラは老木化による樹勢の低下・病気の発生や樹木の成長による鬱蒼とした景観への変化などの問題が存在。改善のために、部分的には伐採・整理の必要性、後継樹や植栽場所の検討が必要。このことについての合意形成が重要。（個体ではなく、樹林・景観としてのサクラの保全）